

吉田敬市著

朝鮮水産開発史

四圍環海、かつては世界第一の漁業国と自負していたにも拘らず、農業に次ぐ甚幹の第一次産業であるわが国の水産業に関する研究は、現経済の面でも、史的研究の面でも農業に比べて著しい立ちおくれを見せている。本格的な漁業史研究の論文が現われだしたのは昭和十年前後からであり、戦前漁業経済史を専門としていた人々は十指にも足りぬ有様で、わずかに羽原又吉、山口和雄、伊豆川浅吉等数氏の論考と渡沢敏三氏を中心とする常民文化研究所同人の手になる諸史料集の刊行によつて乏しいながらも濁をいやしうる程度にすぎなかつた。戦後ようやく日本漁業史の研究も軌道に乗つた感があり、研究者の輩出と共に、水産庁及び常民文化研究所共同の漁業史料の蒐集・刊行が行われ、又漁業史の開拓者羽原博士の大著「日本漁業経済史」が出

版されるなど活況を呈しはじめている。

元來漁村史料は農村史料に比べて数も比較的少く、ことに古代から封建前期にかけてはその研究は困難を極めるのであるが、封建後期以後に関してもまだまだ未開拓の分野が少なくない。ことに先進性を誇る西南日本の漁業史を理解するためには瀬戸内海と共に九州西北海面の状態を知る必要があり、更に明治以降における漁業の資本主義化の過程を知るためには、北洋漁業とならんで、むしろそれ以上に九州西北海面に接続している朝鮮沿岸及び東支那海の漁業の發展過程を知ることが必須の課題となつていにも拘らず、従来二、三の資料を除くと、これに関する研究はまだ現れていなかつた。この時に當つて、吉田氏の朝鮮水産開発史が刊行されたことは従來の空白を満たす意味からも誠に慶賀すべきことである。

著者が京大人文科学研究所嘱託として家舟に関する研究を發表されたのは昭和十六年のことであつたと記憶するが、その後漁業集落研究のため翌十七年渡鮮されたのが機縁となり、爾來朝鮮水産史の研究に専心されること

となつた。十九年には朝鮮水産会から正式に水産史編纂の委嘱があり、研究踴躍以來十三年後の今日、いよいよこの労作を世に問われることとなつた。戦中・戦後の数々の悪条件の累積を克服しつつ、鮮内の重要漁村はもとより、鮮海通漁者を出した国内三十二府県の津々浦々を余す所なく歴訪して資料の採集にあたられた不撓不屈の御努力には衷心から敬意を表さざるを得ない。かくのごとく、畢生の努力を傾注せられた本書の完成に著者がいかに深い喜びを感じていられるかに思い至る時、後学の我々は心から御祝いの言葉を申し上げたい次第である。

さて本書は十一章より成つていいるが、その構成は一応四つの部分に大別出来よう。第一は朝鮮近海の流れと漁況を概観した序章たる第一章(朝鮮近海の自然環境と水産業の概観)であり、第二は第二章(朝鮮古来の漁業と塩業)、第三章(明治以前における邦人の鮮海出漁とその性格)、第四章(韓末邦人開發初期における水産業の実態)の三章で日本人による水産開発の前置を取扱つていいる。第三が本書の核心をなす所の本論であつて、明治以降

朝鮮海域に進出した日本人による水産開発の過程を論じており、第五章（通漁時代の鮮海漁業開発）、第六章（移住漁村の建設とその消長）、第七章（自由發展時代の漁業開発）の三章を主体とし、第八章（水産製造工業の劃期的發展）、第九章（漁獲物の運搬と水産貿易の發展）、第十章（漁業制度の確立と水産助長機関の充実）において漁業に伴う第二次・第三次産業及び漁業政策に関して附説されている。そして最後に第十一章として朝鮮水産業の開發における成功と失敗の原因が反省されている。

以上四つの部分のうち重要なのは云うまでもなく第二と第三、就中第三である。第二の前史を取扱つた部分のうち第二章は古代、高麗時代、李朝時代の三つに分説されているが、中でも最も詳細なのは李朝実録・東國輿地勝覽を駆使して書かれた李朝の漁業及び塩業で、漁梁（一種の設置性漁具漁場）の分布を中心とする漁場の分布、道別の特産漁獲物、権門勢家による漁梁・塩盆の独占と隷屬漁民・塩戸に対する取奪、漁業政策・漁業制度の変遷等が論じられ、最後に朝鮮の在来漁

業の不振と技術の後進性の原因が説明されている。第三章は主として室町時代から江戸時代末期まで（朝鮮では主として李朝）における日本人の鮮海出漁の問題を扱っており、就中室町戦国の頃の半漁半賊の出漁民、対馬漁民の移住漁村建設、三浦の変をめぐる対馬と朝鮮の関係、竹島問題、鎖国以後の密漁がそれぞれ史料の許す限り詳細に論ぜられており、ことに対州の宗氏と朝鮮との関係は竹島と共に今日にまで尾をひく問題であるだけに興味深い。第四章には李朝末期における朝鮮漁業の状況が各種漁法、水産加工、漁船の構造、流通過程、中国漁船の侵入問題等に分けて述べられている。

本論の中心をなす三つの章には通漁時代、移住漁村の建設、自由發展時代と云う表題がつけられているが、これは著者が水産開發史の時代区分に採用したメルクマールを示すもので、著者によれば通漁時代は明治、移住漁村の盛行は明治四十年代より大正にかけて、自由發展時代は大正末年以後昭和にかけての期間であつて、多少の重複はあるが明治、大正、昭和の各年代にもほぼ一致する時代区分

であると説明されている。通漁は日鮮国交再開前の密漁時代にすでに發生していたもので、現地に定住することなく、漁期の始めに現地へ赴き、漁期が終ると帰郷する所の、一漁期一漁法を原則とする季節出張ぎであつて、第五章では先ず各漁法別に通漁開發の實態が現地調査の結果にもとづいて説明され、補足的に通漁船数、漁獲物処理法、通漁区域の拡大状況、魚の商品化にからむ通貨の問題等が記述されている。通漁時代は主に西南日本の沿岸漁業者が伝統的漁法を携えて、船舶で出漁した時代であるが、当時すでに先進的であつた日本漁法が朝鮮漁法を圧倒し、現地住民が日本漁法を取入れはじめた時代であつた。

通漁の段階に移住漁村の建設時代に漸次移行し、周年稼働をめざして定着が試みられるが、朝鮮漁民の日本漁法採用に圧迫され、總督府が保護政策を輕視したため、結局失敗に歸している。

自由發展の時代は動力船の出現に相呼応してはじまり、サバ、動力巾着網より發達したマイワン巾着網漁業と機船底曳網漁業と云う二

種類の資本主義化した漁業が出現し、空前の發展をとげる時代である。又区劃漁業の方面では海苔養殖業が他の養殖業の不振を尻目に躍進をとげ、養殖技術が内地に逆輸入された時代でもあつた。そして水産加工業においてもイワシ油肥の現地処理と云う形で植民地への資本輸出が行われるに至つた。以上のような日本人の手による朝鮮漁業の開發は敗戦による八・一五解放の結果終焉を告げ、漁業の主導権は再び朝鮮民族に返還されるに至つた。

さて以上のような本書の内容を通読した時幾つかの問題点が見出されないわけではない。先ず本書で取扱つている朝鮮水産開發史とは日本人の手によつて明治以降に行われた朝鮮沿岸の水産資源の開發史と云う意味であつて、植民地支配者の立場から書かれた資源開發史と云う性格をなつてゐる。次にその視点は純粹に技術的であり、その内容は朝鮮海域における日本漁業技術の導入の歴史に限られ、前史の中でも在来漁法及びそれと中国人漁法との關係がこゝまた技術史的な面に重点をおいて、特にその後進性を強調しつつ

述べられている。だから朝鮮漁業の經濟構造に關しては生産關係についての記述に缺け、生産手段の面でも労働手段の一部をなす漁業技術と労働対象たる自然との關連に専ら眼が注がれてゐる。従つてこのような漁業技術の導入が朝鮮の植民地化にどんな役割を果したかとか、或は生産手段の変化に伴い朝鮮漁民の生活に生じた変化や彼等のうけた差別待遇についての説明はこの中には求めることが出来ないわけである。と共に本書の中で主役を演じてゐる日本人漁民についても、彼等はすべて漁業技術の開拓者(空間的拡大を含めて)としての視点から描えられており、彼等自身が意識的にせよ、無意識的にせよ帝國主義的侵略にどんな役割を果したかと云う問題は本書の関心外におかれてゐる。又通漁時代の漁民と自由發展時代の漁業資本家との性格の相違も漁業技術の相違だけに還元されてゐる傾がある。以上のように技術史的資源開發史の立場によつて貫かれてゐる所に本書の著しい特色があると共にその限界も存在するのである。

更に日本漁民の手による水産開發の進展過

程を著者は三時代に区分されてゐるが、この区分法についても疑点が存する。先ず技術史的観点から問題が提起されてゐるにもかかわらず、その時代区分を明治・大正・昭和と云う元号と概略一致させてゐる点が曖昧であり、又通漁時代と移住漁村建設時代とは漁業技術の面からそれほど画期的な差があるようには思われなからである。むしろ通漁者の定着は出作り農民の定着と同じく、一連の行程の当然の帰結にすぎない。ただ朝鮮ではそれが十分に貫徹出来ず、通漁者たると移住者たるとを問はず大正年間以降延び止り、いな敗退の一途を辿らざるを得なかつた点に問題があるわけであるが、朝鮮入漁業者との競合關係及び日本人零細漁業者の敗退過程に十分な紙面が割かれてゐないため、その分析も不徹底なままに終つてゐる。要するにこの二時代は地元漁場の狹隘化になやんでゐた零細な西南日本の漁業者が朝鮮近海に新天地を見出し、日本帝國主義的侵略に随伴してその範圍を拡大したにも拘らず、大部分は最後まで前近代的な漁業経営から脱却しえず、伝統的漁法を固守して資本主義化への道を切拓くことが出

来なかつたため、国家権力より見放され、次第に朝鮮漁民の反撃を受け、敗退脱落して行く一連の過程であると定義出来よう。それに對していわゆる自由發展時代とは、通漁時代以来漁民層に寄生し、莫大な中間利潤を吸収して資本を蓄積した鮮魚運搬業者、及び魚問屋より成る寄生商業資本、ならびに漁民層の分解によつて生じた一部富漁層が、大型動力漁船を建造して資本主義漁業への道を歩み、

ついに大洋漁業（林兼）、日本水産のような漁業独占資本を成長せしめた時代と理解されるから、第一次大戦を境として二つの時代に区分する方が、技術史的にも、更に広い観点からしても妥当ではないかと考えられる。

以上のような問題点はあるにしても、前人未踏の分野を開拓され、極めて豊富な実証的資料を蒐集整理された功績はいささかも減じるものではない。或は資料中に聴取調査に基づくものが多いため、その史料の価値に疑をいだく人があるかも知れないが、元來漁業関係には文献史料が極めて少い上に、最近百年にも足らぬ時代の出来事であるから、聴取による資料も同時代史料に近い史料の価値を有

する筈である。ただ史料の処理においていささか羅列的に過ぎ、内面的連関性に乏しいうらみはあるが、それだけに忠実に資料が採録されていると云えよう。なお附録として収められている「朝鮮主要移住漁村年表」及び「各府県水産試験場の鮮海漁業開發試験一覽」等も極めて貴重な資料を提供していることを附言しておきたい。

以上思いつくままに言葉を連ねたため或は著者の真意を誤解し、著者に対して礼を失した点もあつたのではないかと思われる。ここに改めて深く御わび申し上げると共に、日本漁業史の一環としての鮮海漁業史が、この著作の出現を契機として新たな展開の時期に達したことを確信し、その将来に大きな期待をかけるに至つたことを申しそえておきたい。（朝水会昭和二十九年五月刊 四九六頁 英文レジュメ一四頁）

——河野通博——

西岡虎之助著

日本文学
における 生活史の研究

文学作品をその時代の社会生活とともに正しく理解するということは、文学研究者にとつても歴史家にとつても、文学史を研究する場合の中心問題の一つである。本書はこの問題を、著者が、歴史家として、日本古典文学と日本史への限らない愛情をこめて、追究された諸労作を収めたものである。

表題からもうかがえるように、文学作品を通じて時代の生活のみ、またそれによつて生活が文学を生みだしてゆく事情を探究するのが本書の方法であるが、これは著者が永年とつてこられた態度であり、さきとその業績の一部は『民衆生活史研究』（昭和三年・福村書局）としてまとめられてわれわれにも親しいものになつてゐる。こんどまとめられたのは、左のように、著者がここ二三十年來逐次發表されたものに新たな二三篇を加えた十三の論文と短篇十五とであり、古代から近代までのあらゆる時代にわたる。

① 歴史における貴族的要素と民衆的要素
(一九四八)

② 貴族社会の生成と崩壊 (一九五二)

③ 万葉集時代の社会経済 (一九五三)